

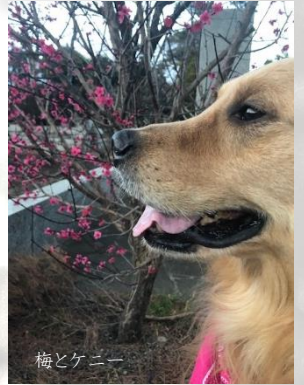
普賢 Fugen



発行所: 天台宗高龍山明王院普賢寺
発行人: 普賢寺 広報部
〒183-0004 東京都府中市紅葉丘2-26-4
電話 042-369-2278 / FAX : 042-336-2610
URL : <http://www.fugenji.com>
メール: info@fugenji.com



普賢寺開創550年



梅とケニー

『暮ると明くと目かれぬものを梅の花
いつの人まにうつるひぬらむ』 紀貫之

目を離さなかつたはずの梅の花が、人の見ていない間にいつ咲いたのだろうか、という紀貫之のこの歌は、正に今の冬から春の移り変わりを見事に表している歌でございます。

今の時代は、電車に乗っても、歩いていてもスマホに明け暮れて、自然の木々に目を配る人も少なくなってきたのではないのでしょうか。幸いなことに、普賢寺の周辺には緑あふれる多磨霊園や野川公園などが多くあることから、四季の移り変わりには気づきやすい環境にあるのではないかと存じます。しかし、そんな中でもやはり梅の花というのは、気づかぬ合間に咲き誇っているものがございます。スマホもパソコンもない平安時代の歌人紀貫之もこのように表現していることから拝察されます。

さて、前置きが長くなりましたが、当山普賢寺は、本年で開創五五〇年を迎えることに相成りました。これも偏に、当山の四十一代にも上る代々の住職の精進と、遙か昔から当山を支えてくださった皆様のご先祖様のおかげであると感じ戴徳の思いでございます。日本の仏教寺院の多くは室町時代に開創されたものが多く、当山も室町時代中期の文明元年(一四六九)年に

開創されたこと、古文書に記されております。ご承知の通り当山は、元々は現在の墨田区本所に浅草寺の末寺として寺を構えておりました。その後、火災や震災が原因で本尊の不動明王像と尊像が残ったのみではございますが、今なお灯火を絶やすことなく存続させていただいていることは、誠に有り難いことであると御礼申し上げます。

しかし、冒頭の歌の梅の花のように、人間の「うつるひ」もまたいつの間にか過ぎ去るものであると、年を重ねる毎に強く思う次第でございます。仲の良かった親族や友人が先に逝き、世の中もテクノロジーも変わり、自分が親しんでいた町並みや行きつけの場所すらも変わりゆきます。

それを、仏教では「諸行無常」という言葉で一つの真理として私達に伝えております。あらゆるものが常ならず、何かしらの形で変化してまいります。しかし、人間は、どうしても「変わらない」確かなものを求め、探そうとします。数千年前からそのようなものは何もないのであると、釈尊は言っているのです。それを、平安時代の歌人は、自然に触れた感動、情感と無常観を合わせて見事に表現されております。

五五〇年という短くも長くもある月日を経てきた当山も、皆様の人生の糧となり、拠り所となるような場所に時代と社会と共に変わりながらも、安心や元気を提供できる場所になればと思っております。この時代を皆様と一緒に過ごせることに感謝申し上げますと共に、今後ともご支援、ご懇情をお願い申し上げます次第でございます。

論もろもろ

仏教

そもそも喪とはなにか

家族や親族を亡くされると喪に服するというところで、その期間は喪中となります。例えば、年賀状を出してはいけない、社交の場に行ってはいけないなど、色々守るべきことが多いようですが、今回は、その「喪」とは一体何なのかを探ってみようと思えます。

1. 喪の起源

「喪」という概念自体は儒教を起源とされ、自発的な悲しみの表現というものが元々の意味であるとのこと。中国では、喪中は長ければ長いほどよいと言われておりましたが、正式な期間というものはない、実は決められてはいなかったようです。日本に儒教と共に伝来した時に、喪という概念が入りました。

2. 喪中と忌中

日本人は、この喪中と忌中を混同することが多いようですが、実は歴史的背景を考えると、この2つには大きな相違があります。

喪中：近親者の死や喪失を乗り越える期間のこと

忌中：近親者の死や喪失を悲しみ、慎む期間のこと
喪中が忌中より長い理由は、ここから理解することができます。江戸時代には法律でこの期間も制定されたほどでありましたが、現在では一般的には、忌中は四十九日、喪中は一年間ということになっております。

また、日本では、神道において「死は穢れ」と捉えられていたため、その穢れが移らないようにするためという意味で、忌中という期間が浸透していったようです。仏教と神道が融合してきてあがっているのが日本人の死生観ですから、この「穢れ」という概念を仏式の葬儀でも尊重して、清めの塩ということを使っていくのです。

3. 喪中・忌中の過ごし方

忌中のお参り：お寺へはいつお参りしても問題はありません。しかし、神社は先述の穢れの考えがあるので、忌中の間は控えたほうがよいです。お寺では初詣も問題ありません。

慶事：基本的に結婚式などの慶事参加は忌中の間は控えた方がよいです。昨今は、喪中の間の慶事は、相手方に了承を得られればよいともされております。



徒然雑記

お寺と神社

平成三十年の外国人観光客数は三千万人を越し、日本は空前の観光化が進んでおります。その時に、日本人もよくわかっておらず、外国人が戸惑う日本の宗教事情として、お寺と神社の違いがあります。

表面的に言えば、お寺では仏様をお祀りし、神社では神様をお祀りしています。というのが、一般的な説明ですが、日本の宗教観を説明するには、これだけでは外国人は深くは理解できないですし、日本の宗教の歴史を踏まえた説明にはなっておりません。

残念ながら日本は明治時代に神仏分離令が出され、神道と仏教が別れてしまったという時代があるために、未だに神社とお寺は別物であると考えられておりますが、歴史を辿れば、神仏習合の時代が長く、僧侶が神社の本殿で法要を行い、神主が寺院の本堂で祈願をすることが当たり前でした。現在は、僧侶も神主も神仏習合の時代に戻れるように、僧侶と神主が行き来するように努力しております。比叡山の僧侶は修行中に山麓の日吉大社にお参りに行きますし、伝教大師最澄は、日吉大社で神様に、修行の無事をお願いしてから比叡山に入山しております。双方がなければ日本の宗教観は成立しませんし、双方を大事にするという行為こそが、日本の宗教観であり精神性であると言えます。



意外な！ 仏教用語

私たちが日々挨拶をする上で欠かせない「会釈」ですが、実はこの用語も仏教用語なのです。この言葉の元の用語は、「和会通釈(わえつうしゃく)」という言葉です。意味としては、一見矛盾する教義どうしを照らし合わせて、根本にある共通の真実の意味を明らかにするということです。

この原義が転じて、様々な状況を考へて考慮をするという意味にも転じました。その後に儀礼にかなった態度をとったり、愛想よく対応をするなどという意味に次第に転化していき、更に、現在の軽いお辞儀になったのは、江戸時代以降ということ、そこまで古い歴史ではないのです。

会釈

今でも仏教の世界では、「会通(えつう)」と言って、元来の意味が残っております。特に日本仏教は沢山の宗派があり、大切にされるお経も宗派毎に異なりますので、深い主旨と共通の趣意を見出し、くることが重要とされております。

また、現代の軽いお辞儀の意味で使われている会釈も、人と人の無礼にならない共通の趣意を見出し、様々な状況に対して考慮していくという素晴らしい行為とも考えられます。会釈をする時に、原義にある人間の主旨を探っている行為なんだな、とふと思えば、よいお辞儀になるかもしれません。



第2回

山口先生の食のお作法

基本の食事 主菜編

前回、日々コンディションよく暮らすためには主食、主菜、副菜を毎食そろえ、果物、乳製品、汁をプラス1品で3品プラス1品とりましょう。とお伝えしました。

では今回は主菜についてお伝えします。歩くためには足の筋肉、箸を、鉛筆をもつには腕や手の筋肉、全身の75パーセントは筋肉で出来ています。その筋肉の素になるのがタンパク質です。肉、魚、大豆製品、卵に含まれています。肉、魚、大豆製品は1対1対1で取ると動物性たんぱく質と植物性たんぱく質2対1でとるとよいです。そして1日1個卵をたべましょう。朝卵、昼魚なら夜肉、又は反対、そしてみそ汁のみそ、豆腐か納豆で大豆製品をとるとバランスのよい食事です。ぜひ明日から挑戦してみてください。



Info

1. 坐禅とシンギングボールとクリスマスローズ開催

3/10(日) 13:00~

- 13:00-13:45 坐禅 ¥1,500
- 14:00-15:30 シンギングボール演奏会 ¥3,000
- 10:00-17:00 クリスマスローズ販売会 @ 花郷園
- 参加ご希望は、普賢寺までお問い合わせ



2. 本堂・客殿照明 LED一斉工事

本堂、客殿の全照明を白熱灯からLED照明に変更いたしました。丸二日間の大工事となりました。地球環境にも気を使って参ります。



3. 府中仏教会、天台宗 歳末たすけあい托鉢運動

歳末には各僧侶と恒例のたすけあい托鉢運動をいたしました。すべて社会福祉に寄付いたしました。



4. 初護摩供厳修

正月28日に初護摩供を厳修しました。ご参加の皆様、お疲れ様でした。



プロフィール
山口美佳 / 管理栄養士
(社)NUTRITION SUPPORT ASSOCIATION代表理事
テニス栄養士 / テニス栄養士®代表
大妻女子大管理栄養士学科卒業
元聖路加国際病院勤務
日本スポーツ栄養学会会員
世界のお茶マイスター



著書: 部活弁当 (地球丸)
コラム: 日刊スポーツ アスレナビ (紙面、ウェブサイト)